

真言宗における荒神の問題

金本拓士

一、はじめに

荒神は、真言宗において古くから信仰されている神である。しかしながら、その荒神そのものはインド伝来の神ではなく、また中国からもたらされた神様でもなさそうである。たとえば、密教大辞典の「荒神」の項目を見てもみるならば、荒神の本体について、第一説は神道でいうところの荒ぶる神であり、素戔嗚尊との関係。第二説には陰陽家が説く所の御年神・奥津彦・奥津姫の三神とし、第三説として仏教の毘那夜迦、荼吉尼、劔婆あるいは摩多羅神とすることが掲げられている。しかし、結局のところは「諸説未だ確証を見ず」として、よく分からない神であることが示されている。

これら荒神の諸説については、『広文庫』から引用するところであるが、ここで取り上げられている素戔嗚尊は、古事記や日本書紀に見られるように天界で暴れる荒ぶる神のイメージからくるものであろうし、御年神・奥津彦・奥津姫は素戔嗚尊の子孫に当たるものであり、またこれら神々が竈の神として祀られていることから、い

つの頃からか竈神の性格を持つ荒神とイメージが結びついたのかもしれない。

それでは仏教における荒神の本拠はどこからもたらされてきたのであろうか。毘那夜迦、荼吉尼、劔婆はインド伝来の神であるが、摩多羅神は中国からの神とされるが、どうも日本で形成された神であるようである。また劔婆との関連は、荒神の真言である「オン ケンバヤ ケンバヤ ソワカ」の「ケンバ（劔婆）」と言葉が共通することで大日経疏から導かれていたが、この荒神の真言自体が本来インドの言葉ではなさそうである。それはかつて本派で発行された教化資料第四集『真言陀羅尼の解説』（智山教化研究所 昭和四十五年）の中において「おお、かまどは乾かしぬらすなよ。」と真言を訳し、さらに豊山でも「オン かまどの穴を吹け、かまどの穴を吹け、スヴァーハー」（『真言宗諸経要集解説』二二八頁 真言宗豊山派宗務所 昭和五十五年）と訳している。いずれにしてもこの真言が劔婆との関係ではなく、虚空の意味を持つサンスクリット語の「kaḍa」と結びつけ、さらに竈神と強引に関係付けしている。また「智山勤行法則」の中では、この荒神の真言が十六善神の真言として取り上げられていることから考えてみると、荒神と劔婆との関係も納得しがたいものがある。

では、真言宗において荒神はどのように取り入れられていったのであろうか。あるいは真言宗における荒神信仰とは如何なるものであるのか。

そこで本論文では、真言宗と荒神との関係を考察してみるものである。

二、真言宗と荒神との関係

江戸時代の『真俗仏事編』には荒神について次のように書かれている。

問う、荒神供の次第法あつて秘して修す。しからば三国伝来の神ならずや。

答う、荒神は日本、出現の神にして三国伝来の神にあらず。阿闍梨の説を聞くに、荒神の法は、もと陰陽家に、この神を祭る法あつて、小野醜醐の流には、この法なし。あるいは余流にありと言ふは信用せずと。瑜公の真俗雜記にも、この義を弁ぜり。しかりといえども、最も祭るべき神なれば、この法を信じて修する、なお可なり。また、あるのいわく、この法は台密の伝うるところ。また釈書にいわく、開成皇子、勝尾にて荒神の崇りを得て、祭法を知らず、時に二の鳥、二つの札を喰み来て落す。これ荒神の祭文儀軌なり。世々相い伝う荒神供なりと言えり。

この『真俗仏事編』は江戸時代一七二三年に子登よつて出版されたものである。この頃までには、荒神の次第法が真言宗においても使用されており、この神を信仰することは悪いことではないとしている。しかし、頼瑜の『真俗雜記』を典拠とするならば、この法がもとと真言宗には存在しないものであると示されている。

そこで、その頼瑜の『真俗雜記問答鈔』（以下真俗雜記）第九を見てみるならば、次のように荒神について言及されている。

御口云。外典ニ云ウ荒神ト。陰陽師ニ云ウ荒神供ト。是レ也。内典ニ云ウ毘那夜迦ト。聖天供是レ也。或流ノ中ニハ付内法ニ修荒神法ト云々。先師僧正ハ此ノ事ヲ未ニ信用ト。此流ニハ都無ニ彼ノ事ト矣。（『真俗雜記問答鈔』第九真言宗全書三十七 百六十〜百六十一頁 以下真俗雜記）

頼諭は荒神とは陰陽師によつて使われていることであり、仏教では荒神は毘那夜迦のことであるとし、荒神法そのものは醍醐には伝わっていないとする。

ここでいう或る流とは、『真俗仏事編』でいうところの天台のことを指しているかもしれないが、あるいは後述するように醍醐以外の真言宗の法流の可能性もある。

さて、頼諭は荒神を毘那夜迦と同一のものとしてゐるが、その根拠はどこにあるのであろうか。『真俗雜記』の頭註には「定深の十八道記同十八道生起」と付しているから、そこに荒神の事が書かれているらしいが、今は参照することができない。そこで頼諭と同時代、ならびにそれ以前の学匠たちの著作から見てみることにする。

教舜『秘鈔口決』第二十五 聖天の「名號異說事」には次のような記述が見られる。

一 常隨魔。含光記毘那夜迦常隨作障故名常隨魔。文 御口云。先師ノ物語云。外法名荒神供。

四部法云。凡人身如影不離作障礙神名荒神。是則毘那夜迦也。設雖不持誦真言法、造立天像安置住所取食上分奉供此天。福德自然出現。文（真言宗全書二十八 四一六頁）

教舜は頼諭と同じ時代に活躍した学僧であり、頼諭とともに彼の事相関係の著作は真言宗において尊重されている。そして頼諭と同じく憲深より法を受けてゐる。

かれも頼諭と同じく荒神を毘那夜迦と同一であるとし、また荒神供そのものは外法であると考えてゐることがわかる。

それでは、両者の師となる憲深はどのように考えているのであろうか。

憲深の『幸心院灌頂極秘口決鈔』に、「荒神最極秘印事」という項目が挙げられている。その内容を見てみるならば、

夫レ荒神ハ、流轉生死之最初。根本無明ノ當體也。而ニ結ニ當印ニ之時。三世ノ荒神和融而無レ有ニ障碍一。生佛不
 二邪正一如ノ道理現前之間。以ニ此印ヲ爲ニ最極密印ト也。荒神者ハ、是レ不動尊也。灌頂ノ時天蓋等是也。宿ニ母胎
 一之時、衣那是也。或成ニ地天一起ニ衆生頂戴之願一。或、現ニ曠野神ニ示ニ世間ノ吉凶ヲ。并ニ是レ荒神ノ利益也。(真
 言宗全書二十七 一四二頁)

とあり、ここで憲深は前記二者とは違つて荒神を毘那夜迦そのものと考えておらず、根本無明當體とし、三世の荒神が和融した時、それは不動尊と同体となり、また灌頂時の天蓋、母胎にあつては衣那と同じであるとされる。

しかし、荒神を天蓋とみなす説は、毘那夜迦の三昧耶形が天蓋であるところから来ていることであり、そのことは道範の著作の中にも見られる。

問。何ソ以ニ傘蓋ヲ爲レ護ト乎。答。傘蓋、者胎内ノ胞衣也。衆生處胎時。胞衣覆ニ頂上ニ能ク禦下母ノ所ニ飯食寒熱等ノ毒ト。其肉身ヲ不レ令ニ敗壞一。是胎内覆護成就者也。迷位ニハ、爲ニ荒神鼻奈夜迦一。言テ三世諸佛兄ト爲ニ障碍神一。佛位ニハ、爲ニ傘蓋ト爲ニ果徳ノ莊嚴ヲ。是ノ故ニ今以ニ傘蓋ヲ爲ニ護ニ三形ト也(真言宗全書五 四〇頁)

このように荒神と傘蓋との関係は毘那夜迦の三昧耶形からくるものであり、そして迷位にあつては傘蓋は荒神として障碍神を表し、佛位にあつては果徳莊嚴を意味することが述べられている。

おそらく憲深もこの説によつて、荒神と毘那夜迦と関係付けているかと思われる。表現上では毘那夜迦という言葉が出ていないが、憲深が言う荒神とは、毘那夜迦を指しているものと考えられる。

いずれにしても、これらの資料からするならば、荒神は毘那夜迦の属性として見なされているようである。

それでは、荒神が、毘那夜迦から独立した神として真言宗に取り込まれるようになったのいつ頃であろうか。空海全集の中に偽作として荒神関係のものが二つ含まれている。その一つに『三寶荒神祭文』というものがあつる。そこには荒神について次のような記述がある。

敬_テ白_ニ一切_三寶_諸ノ神_祇冥_衆當_年屬_星等_ニ而_言サク。夫_レ以_レ法_性隨_緣現_シ種_種形_類。心_識流_變設_ク品_品ノ名_相。就_レ中_荒神_ノ御_前尋_レ其_ノ本_地。或_ハ文_殊善_薩而_大空_三昧_之風_ニ磨_キ無_相法_身之_用。或_ハ不_動明_王ト_ッ而_大智_勇猛_之火_ニ燒_ク有_為妄_執之_薪。垂_迹和_光之_形隨_レ時_ニ非_レ。或_ハ居_ニ曼_荼聖_衆覆_ニ護_ス衆_生。如_ク息_風不_レ離_レ身。或_ハ現_ニ大_鬼王_ト治_ニ罰_ス造_惡。

隨_ニ念_力遊_ニ心_城。故_ニ經_ニ云_ク。心_荒立_ッ時_ハ爲_リ三_寶荒_神。心_寂時_ハ本_有ノ爲_ニ如_來。爰_ニ知_ス荒_神ノ全體_ハ惣_メ不_レ離_レ衆_生ノ一念_ヲ。唯_隨ニ心_ノ順_逆鎮_ニ廻_ニ折_伏攝_取ノ方_便。依_テ人_ノ信_不信_ニ常_ニ與_フ慶_愛福_壽ノ悉_地。凡_尊神_ノ成_ニ益_ヲ如_レ隱_ノ如_レ顯_ノ非_有ニ非_ス無_ニ。不_レ見_而能_見常_心ノ色。不_レ聞_而能_聞所_念ノ聲。我_今凝

ニ随分ノ信心一ヲ述ニ讚嘆ノ言一ヲ。無明法性ヲレハ妄心即佛也。法界自然ノ妙供ヲレハ庵細トモニ實相也。仰キ願クハ三寶荒神和ニ違逆一ハ心廻ニ感應ノ述ヲ給ヘ。若シ爾ラハ三平等ノ風ノ前ニハ速ニ拂ニ内外ノ障雲一。一法界ノ月ノ本ニハ忽ニ授ニ無邊ノ悉壇一。乃至法界平等拔濟。敬白

于時天文二十年辛亥年十二年朔日以南院宥智御本於心南院書寫之了

時安永四年乙未仲秋次六日得上件星祈荒之三 文早卒而寫之。蓋答師德爲二利圓滿耳。高祖之筆體不可疑

惑者乎 曼荼羅宗未資沙門釋快連

文化十二乙亥六月以右本拜寫之了 豊山知新院金資日水

編者曰。右三寶荒神祭文一卷。依古写本出之。文辭甚拙不似祖筆。傳云我 大師作者謬矣

(弘法大師全集第五輯 三三〇～三三二頁)

この祭文の奥書にも書かれているように、これは大師の名をかりた偽書であり、それが天文二十年という日付から、少なくとも一五五二年以前に作成されたものである。そして、この時代には確かに真言宗においても荒神信仰が定着していたと考えることができる。

さらに、この祭文に出てくる「心荒立時爲三寶荒神。心寂時本有爲如来。」の経とは、「仏説大荒神施與福德円満陀羅尼經 大廣智三藏沙門不空奉詔訳」（修驗聖典第一編所収 以下荒神陀羅尼經）と関係するのではないかと考えられる。なぜなら、この経も不空三藏に仮託した偽経ではあるが、その後半部分に「我今方便此身顯現一切衆生哀愍教化。昔日三人大日如来文殊師利不動明王亦貪瞋癡今日三鬼亦復如是意荒立時三寶荒神意若寂時本有如来」とある箇所と一致するからである。

残念ながらこの経が何時成立したものかは不明であるが、この経典が前記「荒神祭文」以前に作られたことは確かである。

それは、この経典に説かれる三鬼とは、飢渴神、貪欲神、障礙神を言い、この神が現世に荒神として現れ、人の辛不幸を支配するものであるとされ、さらに経典では荒神の別名として「那行都作多婆天王毘那耶迦正了智等」と説かれており（資料1参照）、ここでいう「那行都作」とはいかなる神なのか現在のところ不明であるが、この名前が「覺禪鈔」の「聖天」のところで見いだすことができるからである。即ち

四部法ニ云ク。凡ソ人身ノ如ク影ノ不レ離レ作ニ障礙ヲ神。名ニ荒神ト。是レ即チ毘那夜迦也。昔シ顯形メ告ニ舍利弗ニ言。我レハ、是三寶荒神王那行都佐神也。凡ソ不レ敬レ我之人。常ニ貧窮無福ニ。多病多患ナリ。仍レ今可レ修ニ此法ヲ。設イ雖レ不レ持ニ誦セ真言法ヲ。造ニ立天像一安ニ置住所ニ。取ニ食ノ上分ヲ奉ニ供此天ニ。福德自然出現文（覺禪鈔卷百五 大正図像部卷五 四五二頁上）

と説かれ、この部分は、先述の教舜にところでも引用され、また「白寶口抄」（白寶口抄第三百三十 大正図像部卷七 一七四頁上）においても引かれていることから、かなり一般的に聖天の記述と関連して使われていたことが伺える。

しかしながら、ここで引用している「四部法」とはいかなる書であるか不明である。仏書解説大辞典に「四部毘那夜迦」という書名が出ているが、同一のものであるかどうかは現在のところ確認することができないが、荒神が独立した神として形成される上で重要な役割をした書であるように考えられる。

またさらに、この引用と同趣旨の文が、南北朝期成立の『神道雜々集』の「荒神之事」に出ている。

昔在^テ大智舍利弗^一。修行^シ善法^ヲ。建立^{スル}道場^ノ之時、常^ニ為^レ魔歳被^ニ破壊^一。不得^ニ法成就^一。爾時舍利弗大歎怪^テ而隱居^シ。伺^ヒ忍時、一体^ニ有^ニ西八千八百八十八長者^一。率^{シテ}八人眷族^ヲ出来^ル。即^チ舍利弗出^テ相^ヒ「汝^ハ誰^ト」問^フ。答^テ云^ク。「我是^ニ三宝荒神毘那夜迦也^一。亦名那行都佐神也。我是^ニ仏兄也^一。而以往^{ヨリ}修願人不^レ敬^セ我^ヲ故、令^レ破壊善法^ヲ也。我^ヲ不^レ敬祭^一人貧窮^ニ無福短命^ニ多^シ病患^一。一切ノ災難今遭相^ス」。云々。舍利弗白^ス。

「我未^レ知^ル仏荒神^ト云^フコトヲ。自今以後可^ニ恭敬^ス。其名^ヲ今知^ラ給^ハ」ト宣^フ。答^テ云^ク。「我^ハ「那」行「都」佐神。

又毘那夜迦也。即^チ従類九億四万三千四百九十荒神也。是各能^ク知^ル恭敬^一者^ハ、欲^ニ法^ヲ令^ム成就^セ」。即^チ舍利弗備^ニ百供味供物^ヲ奉^レ祭^リ、万願成就可^レ令^ム如^レ是^ノ也。(山本ひろ子 『異神』三四五頁 平凡社一九九八年)

ここで出てくる舍利弗と荒神の会話からするならば、先に掲げた『覚禪抄』と出所は同じものであると考えられる。おそらく、『四部法』といわれるものから、一般に流通し、次第に毘那夜迦から荒神の物語として形成されていったのであろう。

そして、この記述が出てくる『覺禪鈔』が十二世紀後半に作られたものであり、教舜が十三世紀頃であり、また『白寶口抄』十四世紀前半に作られていることから、『荒神陀羅尼經』がその時代から十六世紀前半までには作られていたことが推察されることから、『荒神祭文』以前には成立していたことは確実であらう。

また、『荒神陀羅尼經』の内容が『仏説宇賀神王福德円満陀羅尼經』(参考資料2)に取り込まれていることから、この時期には、荒神が独立した神として見なされていたことが考えられる。

三、まとめとして

以上の点をまとめてみるならば、頼瑜ならばにそれ以前の学匠の著作から見ると、真言宗において荒神は、当初毘那夜迦の属性として考えられており、決して独立した神として存在していなかったことが伺える。

また、頼瑜ならびに教舜が荒神を外法とみなしているが、師である憲深などの著作、あるいは「覺禪鈔」「白寶口鈔」などから見ると、それはまだはつきりとした形ではないが、荒神が独立した神としてとらえられていたのではない。あるいは頼瑜が言うように醍醐の法流にあつては荒神の法は存在しないが、その他の法流の中に荒神法というものが形成されていた可能性がある。

そして、真言宗の中に荒神信仰が定着したのは、おそらく十六世紀以降のことではないかと考えられる。

参考資料一

佛説大荒神施與福德圓滿陀羅尼經

大廣智三藏沙門不空奉詔譯

如是我聞一時佛住光明心殿中與大比丘衆千二百五十人俱皆是大神通方便心得自在文殊師利而爲上首各禮佛足座一面爾時佛入定心三昧身心不動是時從天雨寶蓮華而散佛上及衆會前大地六種震動爾時會中是諸大衆得未曾有歡喜合掌一心觀佛爾時佛放眉間白毫相光照見三千大千世界有一天女來至佛所禮拜恭敬白佛言世尊我觀衆生或先富貴後貧窮或先貧窮後富貴或始終俱富貴或始終俱貧窮以何因緣如是我今於此不可

稱計但有秘神呪名曰如意寶珠唯願世尊聽許我呪佛告天女言我已聽許速疾可演說爾時天女即說呪曰

唵阿羅波闍囊阿銀爾毗羯羅娑婆訶

爾時天女重白佛言世尊我念過去無央數却有佛出世名曰空王如來其佛使者有各三人一者飢渴神二者貧欲神三者障礙神各各三人發大誓願言我於末世顯現荒碑奪取他財物不施饒益或爲衆生雖施與三世諸佛福德我則盜取如影不離身若有衆生欲得福德者若復欲被衆人愛敬者若有佛子欲造立堂塔者欲一切所望決定成就者欲四百四病消滅者皆先歸依於我當供養若我意荒立時爲人被輕慢罵詈福惠少財物爲他人被盜取終成貧窮

無福之身皆是我所作爾時天女如上因緣說已竟時從東方乘虛空中鬼王三人來至佛所前白佛言世尊我昔誓願亦復如是爾時佛讚曰慈悲忿怒譬如車輪闕一輪時不得入度荒神君惟如來權身為保佛法稱假明神那行都作多婆天王亡那耶迦正了智等護法善神十八神王皆悉如是一身分名不信衆生令發強信懈怠群類爲令精進佛陀方便顯示此身具足人面通行八界爲八方軍主八識主不疑本誓早拂萬惡我今方便顯現此身一切衆生哀愍教化昔日三人大日如來文殊師利不動明王亦負曠疑今日三鬼亦復如人意荒立時三寶荒神意若寂時本有如來爾時三人各禮佛足白佛言世尊我今說呪護持人民施與福德除却障疑即說呪曰

曩莫三曼多沒駄喃譏婆譏吽娑珊娑吽發吒娑婆訶

唵欠婆耶欠婆耶娑婆訶

爾時荒神演說此呪已大衆歡喜信受奉行作禮而去

佛說大荒神施與福德圓滿陀羅尼經

參考資料一

如是我聞。一時仏在舍衛國祇樹給獨園與大比丘衆千二百五十人俱。爾時會中舍利弗即從座起前白仏言。世尊以何方便未來世無福貧乏衆生可施與福德。亦有何因緣衆生或時先福貴後貧窮。或時先貧窮後富貴。或始終俱貧或始終俱富。唯願世尊爲世尊爲我及一切衆生宣說要法。爾時世尊讚言。善哉善哉。舍利弗。汝爲利益安樂一切衆生故成如是問。今正是時。我今當說。汝持仏語爲未來世無福衆生分別宣說。

爾時世尊向城西北方三彈指。時乾方忽來二天女。端正無比類。頂上冠白蛇具足四臂。左第一手持如意宝珠、第二手持宝鉢。右第一手持劍、第二手持宝棒。十五童子三万五千眷族共即於仏前合掌恭敬白仏言。世尊、我今持一神咒。名曰如意宝珠。唯願世尊、慈悲哀愍聽許。我爲貧窮無福衆生欲宣說。爾時世尊讚言。善哉。速疾可說。即神王蒙仏許可滿悲願懷於仏前即說咒曰。唵阿銀你。毘羯羅吽。娑婆訶。

爾時字賀神王白仏言。世尊、我今此神咒過去無央數劫前於空王如來所始得聞。自其已來我身福德成就利益無福衆生曾未休廢。恒時爲衆生成福利。爾時世尊讚言。善哉。汝以大慈悲心爲未來世貧窮無福衆生致富貴。誠長夜明珠、貧乏如意珠也。但雖施與一切衆生福德更以有不蒙利益者。爲汝宣說。其障礙神名。自此東南角有三神王。一名飢渴神二貪欲神三名障礙神。飢渴神形如餓鬼形如餓鬼色黑雲。貪欲神形如蝦蟆色五色。障礙神形空虛空色如黃色。此三神王無始已來不相離衆生身。十方諸仏爲衆生憐愍雖施與無盡之福德愛敬如天蓋覆頂上不致其福。如箕笠更以不及其身。何況汝未諸果位。云何能與大福。爾時字賀神王白仏言。我亦知能方便法。頂上冠白蛇爲降伏貪欲神、右手持利劍爲降伏障礙神左手持如意宝珠爲降伏飢渴神。我恒時向巽方護之。故不成障礙。時世尊讚言。善哉。但降伏障礙神非汝力及。是非神咒力。若人欲得福德、每日一遍向巽方誦特此神咒不過三年必成就福德。汝無央數劫已來誦特此咒。故成就福德

愛敬成衆生利益。若未來惡世貧窮無福衆生得聞宇賀名聞神咒、決定転写貧報必成大福貴。何況恒憶持名号誦持神咒者福徳不可思議。爾時舍利弗白仏言。世尊、須達長者何依因縁今生七度福貴七度貧窮。唯願世尊、為我說其因縁。仏書。善哉。今我說之。須達以正信常不修仏事。依之成荒神怒致障礙。常遭障礙等使者奪取福徳。是故貧福転変。我今宣説対治之法。荒神上首多婆天王元品無明是也。三神使者貧曠癡三毒也。此等煩惱其力最大一生補処智力猶不能降伏。仏菩提智能断以之。我為汝説神咒曰。

唵阿伽那。旋陀羅菩提徐帝。結縛結縛。吽發吒。娑婆訶。

若人誦特此咒一返、一切惡業煩惱一時断壞永不現起。宇賀神王歡喜富貴自在。仏説比經已舍利弗等一切天人大衆皆歡喜信愛奉行。

仏説宇賀神王福徳円満陀羅尼經

(山本ひろ子) 『異神』四八一頁〜四八二頁)

(キーワード) 荒神、頼瑜、毘那夜迦、真俗雜記、真俗仏事編